

先日、県経済同友会の筆頭代表幹事で、秋田屋本店代表取締役社長の中村正さんのお招きにより、同会の会場で財務省幹部が「財政」をテーマに講演を行った。私も出席させていただいたところ、その際、中村さんからミツバチにまつわる興味深いお話をいろいろ伺った。秋田屋本店は1804年に創業した養蜂の総合商社である。

中村さんのお話から、

ミツバチの世界では、女性中心で高度な分業体制が確立しており、いわば働き方改革の先を行く社会が形成されていること



蜂の社会

東海財務局 谷内二郎
岐阜財務事務所長

が分かる。女王バチは雄雌の産み分けが可能で、働きバチとなるメスを多く産む。働きバチは日齢に伴い、清掃班、巣造り班、集蜜班などに分かれて一心不乱に働く。なんでも女王蜂は清掃が行き届いたきれいな部屋に卵を産むのだそう。

では、どうすれば女王になれるのかと伺ったところ、産まれた瞬間からローヤルゼリーのみを与えられ続けたメスだけがなるのだという。それは差別ではないか？と憤ったところ、始まらないうが、やや納得がいかない。

数少ないオスは、産まれると日々体力づくりに励み、選ばれし強者だけが交尾を許され、それをもたらすと命が尽きる。また、オスには蜜を集める能力がないので、食料となる蜜が採れない越冬時期になると巣から追い出され、子孫継続のために絶命する。男として壮絶な生きざまである。

中村さんは、このように役割分担をしながら協力し合って子孫を繋ぐミツバチの社会は、子どもたちの教育材料になると仰った。女性の活躍が、働き手の悪い男たちを追い出す日も近そう。